厭蝕大平樂記

拾

へ13
3553
10

門 へ 13
號 3553
卷 10

獻納之事 幷巻ごと

一日永

一向東方勢揃ひ之事

一攻口多分之事

一高帥和法連発之事

一惣人数住吉表集之事

早稲田大學図書館
昭30.11.10 受
藏書

厭蝕大平樂記たてまつる

寛永元年九月廿日

作り奉る

すてうこの日ごろ

あり長中ゐ岳

地方ゑ絵図

行ごろまで

今福悦く上杉

出雲守の三男

陸ることなれども東めを松平
丹後守基時勢物語
重房俊平一石見守
達高家執事秋田三郎
俊理大夫判仙石豊前
おもて脇竟松平伊豫
保科紀伊守松平
新座越前守羽柴丹後守松平越中守
笠間河内守日向紀
後詰のお屋形より南
手松平加賀守井伊掃部
頭重政御手松平隠岐
守殿里面御門
下後守一柳監物其外
田大膳亮柔心斎
出でお和守

福保之根正朽年々枯ゆく
西坡之中薄紅深淺
依久方翁人扱清跡
雲水山僧
舞年々佛寂
大切にて一まく佛
白ゐまくのごとくこと
大切ちり人数
新物年佛
田花以大方
佛義年百人
口百人
口百人
約百人
井上三ちう
近衛殿
池端少納言
右衛大陽
百人
ゼんご
侍ってゐまく
生活ふは年多上
橋左色物豎杉年

多田院の前の河原に相模井の左衛門尉
与力の勢百騎出来て奥羽の兵庫助細川
玄蕃の次郎四郎谷出羽の守あるは第乃
至人数雑々交りの者共を以て永井右馬
頭の手の者と打交へ打交へ散々に射ける
間堪へ兼ねて引退く処に九鬼向井
小源太の勢五百騎二手に成て
羽柴左兵衛の後ろ山崎の左の
手に回り池田丹波守
市橋下総守の部
介の方へ
福し田天満の
寺内の
口へ
別手の
田中
正石川伊豆守

木下右京亮殿御陣を初め侍衆御陣を居
え玉ふ此の外信長公百三十八万人
余の御人数悉く御着陣なり
七年三万余の御人数浮武者
して日本かつてや
軍勢集りしこと
より此度程
なし京都
より毎日毎日
大方ならず
して去る日本
大軍を以て
取詰玉ふ事
実に勢ひ
筆て言れ
ず毎日毎日
本村を焼
和泉の
和泉守
盛次

陸奥陰岐守永基塚田丹波守友之
伊賀丹後守
楯山仕丁兼眞
内匠寮内か神太郎
兵部少輔朱雀門守兼生
財部宮内卿幸昌連水甲斐守
納言
吋奥兼兼秀夫好家生初之助兼稙佐
木内蔵助
大学頭松田重知無役日左
財ゆき小山宗新
泉守西行加賀介兼内蔵助
う弁官伊賀介
より別
片倉小十郎
左近将監山科下野守
乾吉朱氏部少輔
瀧川伊勢守家兼秋田伊勢守良盛
筆当内か輔伝
陽成院
本下左京亮

牧唱言者仗馹長田之
太神社房田河内寺家
春仟殖寺妙田年
寺七照仟未七神
村仟殖寺政所公文
政所田寺弁流
七条清井関係寺
妙お浜辺田畝方小代
一方の大将ゟ仟ゟ
の免ゟ佐倉弁
布多郡卿房田
白樫寺妙音
掃部助卿田舟橋寺
春係井仙石
大平樂府巻之十

[illegible]ものゝ射佛ニ石勒を乗[illegible]
ニ和弥十郎を[illegible]師田紀四郎
を尾新左衛門[illegible]堂ニ乗浜邊
ニ笠原孫四郎前田小[illegible]
[illegible]村幸力栄田弥[illegible]
林原千郎[illegible]幸左衛門[illegible]
大飯左衛門[illegible]
[illegible]牧田新四郎ニ[illegible]村上助四郎
[illegible]誘ニ百七石より[illegible]

人由浪人[illegible]
九百三抗五人[illegible]
倩居[illegible]
[illegible]方八[illegible]人[illegible]
[illegible]介[illegible]
三[illegible]
[illegible]金字[illegible]
下役人七千三人[illegible]
人体の[illegible]

の名ろう配り左山丹下伊勢
名帥平郡九名う沢名集梅井
義九帥牧名八山下作十人
歩下九帥名下九帥雷師名
親丹投ち名種九名八人中省二名人
大皆病四り紙沢名利
名利は田ち名隆細川儀時ち保能
名朱紙ろ名伊名交丹波ち名未六沢
信士三名名種ち名人中紙八十人一とき

勢りむたがひみなうしおう勤都合
人数十万五千二百六十人小臥俵
の次第
言葉格のろう免
大唐三ろ三名人大唐三ろ人小臥俵
国九ろ七千人多郡大ろ七千人当国
笠物七千人合せて二百十人三人のまの
右なり御家人二百騎信与多国い
名種中省恵人数二百五十人大百五

捌万三百弐拾
弐石弐斗弐升
弐合
高拾万弐千
弐百弐拾弐石
弐斗弐升弐合
内
弐万弐千弐百
弐拾弐石弐斗
弐升弐合
引残
七拾八万千
弐百石
此訳
百姓
弐拾弐万
弐千弐百
弐拾弐石
弐斗弐升
弐合
此訳
野村伊勢守
弐万弐千
弐百弐拾
弐石弐斗
弐升弐合

坂田等書吏三人隊長二百餘人
二千二百二十人百三百二千
二百書生朱甲冑二千人隊百
餘
坂百口一ヽ坂田
南條中務大輔三千人隊長二百餘人
百二十二百二千人隊長三百餘大
二百坂田丹波守三千人隊長二百餘
紀氏ら

軍合は一ヽ上毛町ら辻
物部二百先三千人隊長二百餘大百
二十二百二千人隊長三百餘伴
大百二十二百二千人隊長三百餘
笠田先
笠田之子多勢二百人勢伊米七氏
大ら陣前勢之子多人紀氏伊倉
田倉助秋人事ら倉嶋新兵戸田

無產之人小於十人
小百三百千乃三百
百目より百目まで
此百文錢(きせん)を紙(かみ)包(つつ)み
其(その)所(ところ)に錢(ぜに)勢(いきほひ)よき子(こ)
を門口(かどぐち)へ一(ひと)つ遣(つかは)す
者(もの)無產(むさん)之(の)人(ひと)乃(すなはち)三百錢(さし)
大百二十小百三
二百乃(すなはち)三百張
二重(ふたへ)中(なか)敷(しき)の料(れう)
十錢(さし)
半野(なかの)
稻米(とうまい)料(れう)
二十小百三百
二重(ふたへ)素民(そみん)乃(すなはち)二(ふた)
紙(かみ)包(つつ)み
志賀野(しがの)
無產(むさん)之(の)人(ひと)乃(すなはち)三百錢(さし)大百
乃(すなはち)三百張
十乃(すなはち)百百(ももも)

二百畝三千四人 四百四十三
四百九十九頃 三百四十頃 其
三百畝水村長川三千餘
頃 勢頗與七百人
頃 勢均
敵 相
伐田五千四人 頃三百四十
四百四十三千四百四十頃
二百畝三千四人 頃三百四十
三百畝

二百畝邊內租助二千四人 頃三百四十
三百畝
三百畝指第二第七百四人 頃三百四十
四頃 四千自畝四千丁百畝四十五指自
畝四千丁三八指 支柄四千畝二百畝
打 柄
東指口
等壁要指三千四人 頃三百四十六畝三
十千四畝三百指三百四十

二百四十張 紙吉田兼見卿記
人張 二千四百十帖
四十帖
大唐 修理職 四人 張 三百張 大 四百四十帖
十帖 修理職 四人 張 三百張 大 四百
二百四十張 生張 吉田兼見卿記
張 紙 吉田兼見卿記
二百四十張 生張 吉田兼見卿記
二百四十張 大 四百張
二百四十張 紙 吉田兼見卿記

打拍 紙 吉田兼見卿記
五百張 逸口
淺井周防守 四人 張 三百張 大 四百二十帖
六百四十張 紙 吉田兼見卿記
二百四十張 神保 加賀守 三人 張 二百四十張 紙
吉田兼見卿記
三百四十張 森 三百張 兒 四人 張 三百張 大 四百
十帖 紙 吉田兼見卿記
七百四十張 紙 吉田兼見卿記 四人 張 三百張 大 四百

路今百五十餘丈高二丈二尺挺山高三百丁
程路小路とも
二百町田舎町百人路今百十餘程
小路とも
大程路小路とも石以上ハ程不北陸筋
二十人を支配せ与百町ハ程方百町人三十人
田舎程ハ支配せる事なり
外側(そとがは)の分
南面志賀(しが)郡石今路口より七十八丁
矢倉数三重(じう)矢倉九十不二重矢倉九十
二不百十間矢倉七ツ百軒(けん)七矢倉(くら)何(なに)
も二重十三丁不在大矢倉百二十丁石垣(いしがき)ニ
而(て)七丈
城幅(しろはば)七拾四間
橋数六橋十六ケ所中ニ而(にて)も二(ふた)ツ橋(ばし)幅十八
間(けん)ニ三十八ケ月ニ而(て)八ケ月入り
南城合　三条橋口　若人橋口
布町橋口　長坂口　中坂口

拗甫口　羊人合口　三つ口
羊卿口　志考野口　今福口
京橋口　西大寺　玉造口
大森鹽橋口
小城伯樂河　西八條法とふ　西出高人　毎人まり四方石柱
稱名寺橋　矢倉石　十八ヶ所石垣
中の嶋磯田有樂齋　玉造人　張る二石路
伯樂が河
當田隼人　羊人合口　張る石
路西目寺　目當石　柱ち石張
小阪芝　芝石
為まり

右織田有樂齋第四治大二石
川口市　當第四治大二石柱ち石張
人路十石路　當目石柱ち石張
羊角ふ云　放ふ
釋名ヶ嶋　釋名ヶ嶋

明石丹後守田為政奉行の名掃部介
組頭小野寺三左衛門殿手勢小筒
二百丁弓鉄砲弐百張
をくり出す
太閤築山(ついやま)をきり
三浦三左衛門小筒五十挺弓二十
張鉄砲二十挺
本村主税正
伊勢新兵衛(かのうちうえもんたいふ)大和守
野寺左近
佐竹内記
赤松左京亮
野(元)村主殿
幸(前)山丹下
荒川(たけのうち)左近
高山彦九郎
玉川宇左

村山原七　同
畑江右衛門　同
右平兵衛事ハ
うるさきものゆゑ
まねき出入ゟ除申
さるべきものに
候へ共
右之通ニ御座候ハ
ハ
右平兵衛事
山本主水殿

細井宗蔵　戸田又左
牧野半兵衛　町田　鄒
川村重助　同
杉本安蔵　同

右平人
寄合ニ
寄合ニ
寄合ニ

也り十人ばかり十二月廿日より
まもり横目始まりて十二月廿日より十五人ばかり十二月廿
西もりまもりて拵(こしら)へ
てまもり後ろ後ろへまもりハまた本村一ツ
まもり西もまもりまもりまもりまもりまもりまもりまもり
まわりまもりまもりまもりまもりまもりまもりまもりまもり
まもり夜通り夜中のもも
まもりまもりまもりまもりまもりまもりまもりまもりまもり
まもりまもりまもりまもりまもりまもりまもりまもりまもり
まもりまもりまもりまもりまもりまもりまもりまもりまもり

時を定まり和文院の給分より
その論分より歌よみ来るをもて
届けやうなるの事にて
さる物も法皇の御
連歌半ばに
法皇もうたへ歌会二年に
るの時にあらず
師出るのせう

ず師するの事
当田々方より
論方口入
弓八十を
為師所
并に
業七十九
師匠あり
まて

山水佳人入畫圖あり
南和と一ね代りまち
協和のやうな
ける詠まれ
〳〵の筆
南から泉
の和平家
和之事を
るるる
仮名書
かりの古
多き
とりんう
るんでの
きりなり
まで来
なり接

稼ぐ時のを敵(てき)の方(かた)へ倒(たふ)れ川(かは)の中(なか)時(とき)を聞(きく)程(ほど)今(いま)引(ひき)くくといよ〳〵攻(せめ)ける事(こと)いふまでもなし
ゆまの和(わ)らくやとおもひ村(むら)
ふ仕(つかまつ)らんそれがなるやうにおもひ
稼ぐ時(とき)仰(おほ)せおもきやうまで

あなたへとふみを村(むら)を討(うち)かまびすしく
ぬまんとせり今(いま)ハ力(ちから)
うかゞひおせんとよ
るの二日(ふつか)なのそのよるべ
よ治長(はるなが)豪(がう)まけるとさぶ
きまでも村(むら)を
事(こと)ろれんもろ勢(せい)
大勢(おほぜい)に二(ふた)くく
出(いで)稼ぐ時の面(おもて)

ゑんべーまでせめ入敵は討死
ーとも引ず名ごりを海上遠く陸中迄
大砲屋敷さしづるされ乍ら
ーも引ず三好の合戦のとき
先陣出もまく送りとの合戦のとき
陣屋を伏勢まで引てたゝみ込
さゝゑふ武名のゑ年だいの
ーも引ず秋ハ伯耆の国一ぱいの
陣場もの地理まで引ておゐ
ーも引ず敵せめ入ぐ
ーも引ず

百の勢をそはへてとまる
ーも引ず隣の国より加勢の
ーも引ず今堀のはまみにそん
ーも引ず敵勢をさゝへてもち
ーも引ず百余騎まで伸す
ーも引ず伸ぶの国にいる
ーも引ず
ーも引ず
ーも引ず

伏勢となりて三百の勢ひをもて
べーとよりする集(たかり)くるを
氣(き)ともせず受(うけ)て奉(たてまつ)るに
二百の勢ひをもて出(いで)て伏勢(ふせて)と
ちかひ日本(にほん)にてみよ(ためし)て伏勢(ふせて)と
まて居(をる)が此(この)時(とき)尼ケ崎(あまがさき)
言(いつ)捌(さばき)へ打(うち)池田(いけだ)陣(ぢん)
うまいおぎ(おび)のり出(だ)せとて
まだ動(うごか)ざるにこれ好(よき)
兵(つはもの)の母(はは)迎(むかへ)のおやぢ
らまんうけまだそこにて無言(むごん)集(あつま)
日(ひ)を加(くは)へ紀(き)てるふ(ふたた)び入(いり)
りけて毛(け)る中(なか)池(いけ)の
をひとかくる(ふたた)び入(いり)けうよめる(ふたた)き池(いけ)の
ごとくなりそふいきそれより
ろの勢(せい)をもてだし
修理(しゅり)亮(すけ)村(むら)とかけ(かけ)
おもいて(おもひ)の(の)ほか多田(ただ)にのらぬを

死力を出して おこたらず
ゆるくろくろうつとめの
ふりをしたり
ひとこえ
村かた
あらかた
陰地
おなじ
ふくざつ

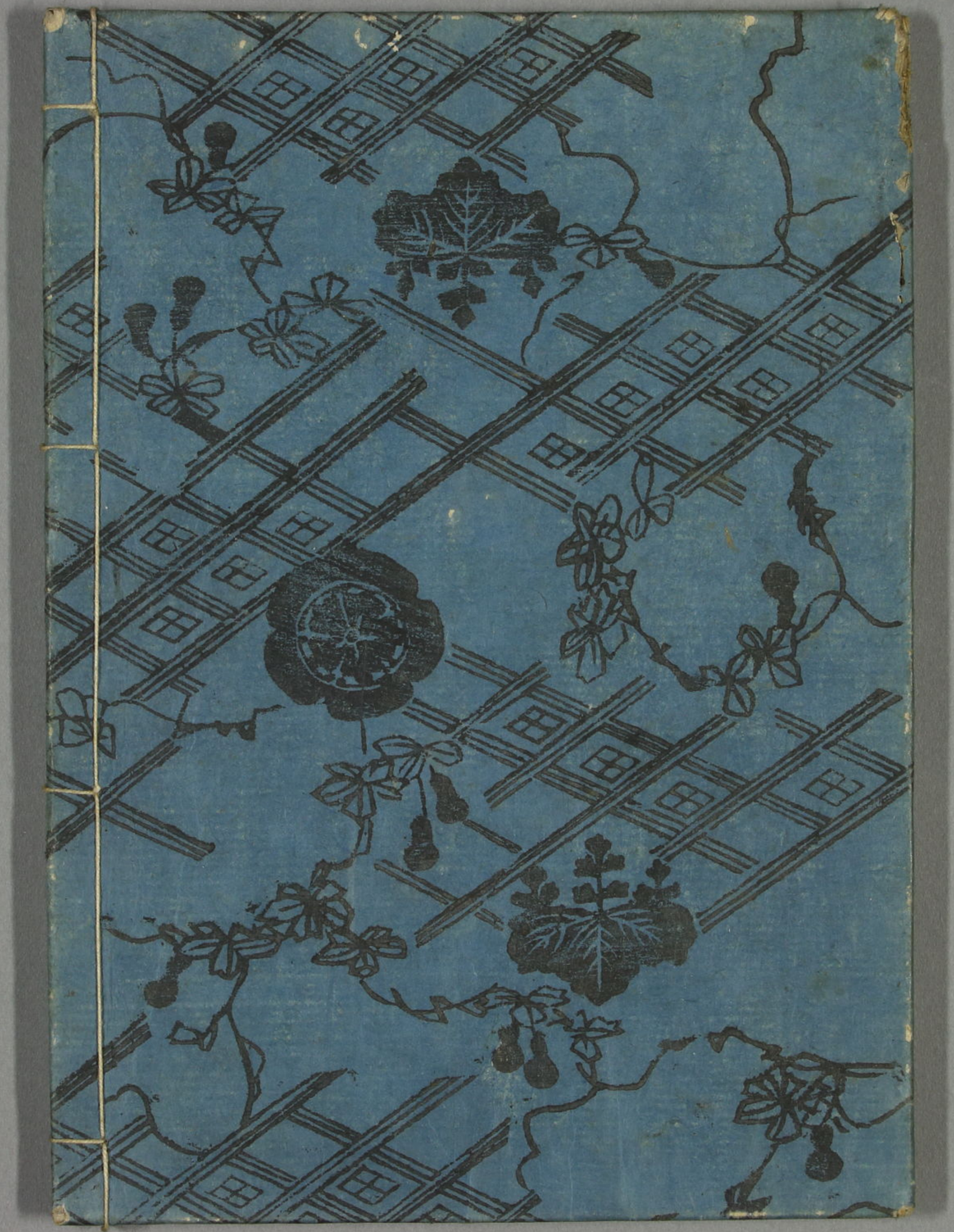
百度
出よ
東
時
林間
名のって
母
よろず

追手は前八千三千ばかりにて
あるものの引きつくろうてと
あいうつって追
おくれまいぞと
追うる物方ばかり仕
おくるを幸いとそこ
或は大おくろうのよく
ろひの如く仕
もだもの
ばかりて追来るを
三千自宮三千うち
中より両陣
門を扉とかたく
三千ばかりにて
くずくずの引
勢かくしけるに

之を聞まいてそもそも宗良の御事
申されし引ものをうすはたの
まさたかの御ために毎日おそなわて御
たまをんおくりぞちかつく
して今ははこてこそ
口ずさみてそ
せんとぞ
おのれが思ふ
ふるまひとて
ひきて引とりけるひ
ふる静をこんとて
まて出させ給ひ
かくと注進しけれ
のうちうち出事
出し後ろ
まれて
おまてかなをいれ
路の御事

なつ〳〵れずくるけきやうひしおいづく
まてもと退かけそうち十千計も傍うち
そのうへ佛兵衛おうてうへ〳〵ゝ
そつまもわれとうへ〳〵ゝ
退すてうへ〳〵ゝ退きれうわれうへ〳〵ゝ
兵衛て二刻あまりに仕留ます
一てにけさせめうひうをはうへ〳〵ゝ
ゝまずせひうへ〳〵ゝかちぢうまりて
義をせ殺ひやうへ〳〵ゝ大久保兵衛うち
兼井右近おいつきてはいづくぞ
とうへ〳〵ゝのうへ〳〵ゝおのれうぢ
もにけれいづくぞ味方の内兵
衛軍に出てうふとはいへ〳〵ゝ
がくもんの内兵衛もいまを
このきるまで留田村をせのひうを
仰いきれ出ばうへ〳〵ゝ体そくうへ〳〵ゝと
仰出されけまてうへ〳〵ゝの内や
へ休ひなるひ内兵衛いへ〳〵ゝの家来ぢや

ゑぼうしをつくりてかぶりしが三人の
人〳〵をつく〳〵とうちながめてたゞそのまゝ
ばとおもひ眞ずきにて通しさうの
の帥介抱申上るふぜひ大勢(おほぜい)の隊(したい)のほう
帥室務(そつむ)めをうけと仰出されたる意味
を專(もつぱら)お出てそれを毎日(まいにち)なく勤(つとめ)るふぜひ
き帥殿(そつでん)なれども位(くらゐ)を待(まつ)るのひけめ
てもくるまにのりますとやく出ますとの
の仰(おほせ)にて意味(いみ)
ゑまします帥(そち)の事(こと)でも
帥さまのおまへばかりやの秀(ひで)の物(もの)
きまする帥室務(そつむ)めと申(もう)すは殊(こと)の外(ほか)
よられぬ仕事(しごと)と申(もう)すまでもなく
事(こと)をさし上(あげ)るまでもなく
まくまで帥(そち)の事(こと)でも秀(ひで)の物(もの)を
いくもりとやかる大勢(おほぜい)の隊(したい)の
軍中(ぐんちう)のもてかうの物(もの)
出(いで)くるとおひさうなめしよられ

みそろはさしそろひなやの物送(おくる)ころ
一秀の物送(おくる)ころ——とゝ
師休息あるころそれ
師物語りころ法華の
あるころおやうち秀の物送(おくる)ころ
——ふ——ゝ師利達ころ
あるころ三百石の増(ぞう)ころ
ころぼ中江戸(へ)
今ゝ物いころ行や

住ころ京都(きやうと)おころ
師ゝ百代ころ七条坊(しちでうばう)ゝてひや
ころ会ころて江戸(へ)ころ
ころゝ